

エ
ピ[°]
ロ
ー
グ

物書きには、読んでもらえることを書くタイプと、読んでもらいたいことを書くタイプと、書きたいことを書くタイプがある。私は無条件に書きたいことを書くタイプである。

お読み頂いて、辟易されたであろうか。そうだったかとも思う。そうでは無かったかとも思う。

プロログで、考古学は人間の営みを対象としているため、政治、経済、社会、文化から理学、工学、医学、農業、漁業、繊維、土木建築などに至るまでほとんどの分野の方が、専門分野から参加できると述べた。しかもロマンと推理の楽しみが溢れている。だから考古学は、国民的にも人気のある、開かれた学問分野だと思っている。

ところが、考古学を専門としている考古学界は必ずしも開かれてはいないように見受けられる。旧説を守ろうとする力が最も強いのが考古学界で、新学説を無視しては、在野のアマチュアに大きな業績を持って行かれている。他人の「持ち歌」は歌わぬ風習があるので、必要がなければ他人の研究に口を出さない。特に特殊知識を持つ専門家は、一般考古学者からの厳しい批判に晒されることが少なく、過去の間違いを修正できずにいる場合がある。

本書は、考古学上の争点をめぐって、筆者が如何にして定説と付き合ってきたかの歴史である。

青銅器鉛産地定説、三角縁神獸鏡魏鏡説、弥生五百年遡上説、高麗尺定説、製鉄古墳時代開始説、

古代間接製鉄法、硫化銅鉍使用説など、よくも批判ばかりしてきたものだと思う。日本で始めて実証主義を唱えた重野安繹氏は、根拠の曖昧なもの全て切り捨てて「抹殺博士」との異名を奉られたが、筆者も似ているのかも知れない。しかし、筆者は、主観的には、好奇心の赴くところに従っただけのことだと思っている。目的が、批判よりも新たな学説の展開にあったことは、ある意味で十分にご理解いただけたかと思う。

視点を變えて考古学をみる。それは、今の私達にとって何も特別なことではなく、自分の専門分野から考古学を覗いてみることだと思う。意外に面白いテーマがころがっていて、何かを発信してみたくなるはずである。そう感じて下さった方は、筆者の一方的な語りにならば辟易されなかつたのではなからうか。それと共に、本書では筆者の「二毛作人生」についても、ところどころで紹介してきたので、共感して下さった方も居られると思っている。

本書は、すべて学術論文として発表済みのものばかりなので、いわば編集しただけであるが、結構楽しい作業であった。こちらが楽しいと思っただけ、あるいは関係者が不愉快な思いをされたかも知れない。内容的にはすべて論文上で書いたことであり、批判的なことがあっても、それは個人的なことではない。固有名詞を必要最小限にとどめたのは、多少の配慮のつもりである。

引用文献についての記載も煩雑さを避けるため、最小限としているが、原典等については、巻末に示した筆者の関連論文に明記されているので、参照願いたい。

最後に、アマチュア研究者としての気持ちをひとつ。いつか一度は考古学を職業とする方々に、こんな文章を書いて見たいと思っていた。

有力な仮説があると、みんなで引用する。みんなが引用するから、おそらく正しいのだろう。次の研究者もそれを引用している内に仮説がいつのまにか定説になる。それに異を唱えるアマチュアがいると冷笑を浴びせる。かくして定説が肥大化する。

しかし誰かが言った。軍隊と研究は多数決がなじまない。私も思う。研究は最も高尚な遊びだと。言うなれば、アルバイトをしながら、売れない小説や絵を書いているところに研究の醍醐味がある。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、多額の研究費の他に、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に冷笑を浴びせるとは何事かと。

要は考古学を職業としている方々が、如何にめぐまれているかを述べたかただけであるが、

ちよつと過激すぎたかも知れない。

筆者は、職業生活を終えてからも、韓国の若い学生たちと新鮮な毎日を送り、年平均で四篇の論文を発表し続けている。このようなエキサイティングな「二毛作の人生」は、まちがひなく妻・和子の「早く会社を卒業して、韓国にいつてらっしゃい」と言う言葉で始まった。私が嬉々としているのを喜んで見守ってくれている妻には本当に感謝している。また私の韓国行きの願望を快く受け入れて下さった韓国国立慶尚大学の故・姜東湖教授(元法学部長、日本文化研究所長)をはじめ、職場で一緒に願っている材料工学部の許甫寧教授、嚴龍洙教授にも、心からお礼申し上げます。足掛け六年間に渡る日韓の往復生活の中で生まれた友人は、会社時代の友人よりも多い。それを書く、またもう一冊の本が必要である。

最後になってしまったが、本書の出版にあたっては、古代史・考古学の大先達である大和書房の大和岩雄様から声をかけていただき、編集面では制作部の佐野和恵取締役と小野春枝様に大変お世話になった。あまり制約のないなかで、のびのびとして気分を本を書き上げることで、心から感謝している。

第一章に関連する筆者の論文

「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐって」『考古学雑誌』八五卷一号(二〇〇〇)。

「三角縁神獸鏡・泉屋博の解析方法は重大な誤り」『邪馬台国』八七号(二〇〇五・四)。

「鉛同位体比から見た三角縁神獸鏡の製作地」『情報考古学』十一卷一号(二〇〇五)。

「鉛同位体比から見て三角縁神獸鏡は非魏鏡」『東アジアの古代文化』一二九号(二〇〇六・秋)。

第二章に関連する筆者の論文

「炭素十四による弥生時代遡上論の問題点」『東アジアの古代文化』一二七号(二〇〇六・春)。

「鉛同位体比から見た弥生期の実年代」『考古学雑誌』二〇〇六・二(投稿)。

第三章に関連する筆者の論文

『まぼろしの古代尺・高麗尺はなかった』吉川弘文館(一九九二)。

『考工記』の尺度について『計量史研究』一九卷一号(一九九七)。

「『三國史記・遺事』記事による新羅王京復元と古韓尺」『百濟研究』三六輯(二〇〇二)。

「結負制の復元と代制の起源」『韓国古代史研究』三十号(二〇〇三)。(韓文)

「出雲風土記の里程に現れた古韓尺」『百濟研究』三七輯(二〇三)。(韓文)

「古墳築造企画と代制・結負制の基準尺度」『考古学雑誌』八八卷二号(二〇〇四)。

「古代日韓の土地制度における基本尺度」『計量史研究』二六卷二号(二〇〇四)。

「高麗尺説論拠の総合批判」『朝鮮学報』一九五輯(二〇〇五)。

第四章に関連する筆者の論文

「古代日本に間接製鉄法があったか」『ふえらむ：鉄鋼協会誌』五巻十号(二〇〇〇)。

「日本の古代鉄備とその国際比較」『鉄と鋼』九一卷一号(二〇〇五)。

「鉄滓・鉄遺物の分析をめぐる」『鉄鋼協会・鉄の歴史』(二〇〇三・六・一五)。

On Criterion for Smelting or Refining Slag in Ancient Iron Making, 5th BUMA,

Gyeongju, Korea, 2002

「金属生産量の歴史(2) 銅」『バウンダリー』(一九九九・二)。

「奈良大仏の銅の製錬」『バウンダリー』(二〇〇〇・三)。

「梵鐘と銅産の推移」『バウンダリー』(二〇〇〇・五)。